

便混入物から腸瘻が発見された二例

◎村松 すみれ¹⁾、尻無濱 真子¹⁾、鈴木 航平¹⁾、石川 秀和¹⁾、高坂 仁美¹⁾、鈴木 直子¹⁾、大塚 美和¹⁾
掛川市袋井市病院企業団 中東遠総合医療センター¹⁾

【はじめに】女性や乳児では、採尿の際にしばしば糞便が混入するが、一般に男性では糞便の混入は見られない。男性の尿中に糞便混入が見られた場合、膀胱腸瘻が疑われる。膀胱腸瘻とは、膀胱と腸管の間に瘻孔を形成することで、膀胱と腸管が交通し糞尿を呈する疾患である。原因として憩室炎、悪性腫瘍（大腸癌など）やクローン病などがあげられ、気尿、糞尿による尿路感染症が主な症状である。今回二例、男性の尿沈渣物から糞便成分を検出し、医師に情報提供したことで疾患を発見できた経験をしたので報告する。【症例 1】70 代男性。気尿症にて紹介。内腺腫大、癌を疑う所見は認めなかった。無症候性膿尿細菌尿あり。検尿で便混入物が検出された。その後、下部消化管内視鏡検査を行った結果、膀胱の頂部付近の後壁に瘻孔があることが確認された。最終的に S 状結腸・膀胱瘻と診断され、人工肛門造設を行った。【症例 1 検査結果】尿定性：比重 1.021、pH5.5、蛋白(2+)、糖 (-)、潜血(3+)、ウロビリノーゲン(normal)、ケトン体(-)、ビリルビン(-)、亜硝酸塩(-)、白血球(2+)、色調茶褐色、混濁(2+) 尿沈渣：非糸球

体性赤血球 >100/HPF、白血球 > 100/HPF、桿菌 (3+)、便混入物(1+) 【症例 2】50 代男性。クローン病（小腸大腸型）の既往歴あり。原因不明の反復性尿路感染が認められていたが、検尿で便混入物が検出された。その後、膀胱鏡検査を行った結果、膀胱後壁に瘻孔が二つあることが確認された。最終的に回腸・膀胱瘻と診断された。【症例 2 検査結果】尿定性：比重 1.022、pH6.5、蛋白(±)、糖(-)、潜血(2+)、ウロビリノーゲン(normal)、ケトン体(-)、ビリルビン(-)、亜硝酸塩(-)、白血球(2+)、色調黄色、混濁(-) 尿沈渣：非糸球体性赤血球 10-19/HPF、白血球 >100/HPF、桿菌(2+)、便混入物(1+) 【結語】今回、尿沈渣成分の臨床的意義が高い症例を二例経験した。両症例とも膿尿が強く観察された。男性の便混入物であったため強く疑うことができたが、女性の便混入物を発見した際も、膿尿であるか、既往歴はあるか、他に重要な成分がないかなど注意深く観察し、膀胱腸瘻を疑う際は臨床側に情報を提供していきたい。連絡先：0537-21-5555（内線：2220）